

日本語の「Vでもいい」の意味について

陳 林 俊

1. はじめに

本稿は評価のモダリティを表す日本語の「V(動詞) でもいい」の意味について、Vの主体の人称との関係から分析したものである。「評価のモダリティ」を表す文末形式について、高梨(2010)は表1のように四種類に分け、「Vでもいい」はこのうちの許容系に分類されている。これを受け、本稿では「Vでもいい」の多義的意味について、「許容」の視点から統一的な把握を試みる。

表1 高梨(2010: 29)における「評価のモダリティ」の分類

必要妥当系	肯定評価類：といい、ばいい、たらいい
	妥当類：ほうがいい、べきだ
	必要類：なくてはいけない、必要がある
	不可避類：ざるを得ない、ないわけにいかない、しかない
	その他：ものだ、ことだ
不必要系	なくてもいい、必要がない、ことはない、までもない
許容系	でもいい
非許容系	てはいけない、わけにいかない

2. 先行研究

本節では「でもいい」に関する先行研究のうち、本稿の基盤となる奥田(1996)と高梨(2010)について概観し、本稿の分析の視点を定める。

2.1 奥田(1996)の研究

奥田(1996)は「可能」の視点から「してもいい」を取り上げ、その意味について以下のように論じている。

「してもいい」に固定された、／「私」の意志によって「私」の、これからの動作は可能である／という意味は、話しあいのなかで、さまざまな場面にしばられながら、動作主体

の人称性をとりかえて、許可、承諾、提案、許容のような場面的な意味に変容してゆく。
(奥田 1996: 171)

このように、奥田 (1996) は、「でもいい」のさまざまな場面的な意味は「(話し手の) 意志による可能」から変容してきたと主張している。しかし、奥田 (1996) は「でもいい」の様々な「場面的な」意味について、具体的にどのように動作主体の人称性を取り換えて変容してきたのかについては触れていない。

2.2 高梨 (2010) の研究

高梨 (2010) は、「でもいい」の基本的意味を「当該事態が許容されることを表す」として、その二次的意味を表 2 のように示している。

表 2 高梨 (2010: 70) における「でもいい」の二次的意味

		当該事態の制御可能性	
		制御可能 → (当為判断)	制御不可能
当該事態の実現性	未実現	行為者の人称 聞き手→行為要求 → (許可) 聞き手以外 話し手 → (意向) (a)	(許容) (b)
	非実現 ↓ (反事実)	行為者の人称 話し手 → (後悔) 話し手以外 → (不満) (c)	(不満) (d)

表 2 の (a)～(d) の四つのケースは具体的に次のとおりである。

・ケース (a) : 許可・意向

ケース (a) はさらに次の三つに分けられる。

- ・当該事態が制御可能で未実現の場合、行為者が聞き手で、行為要求の機能を帯びると、「でもいい」は聞き手に「許可」を与える文になる。

(1) そんなに塾に行きたいのなら行ってもいいよ。ただ先生に平気で嘔吐くのだけは止しなさい。(高梨 2010: 70)

- ・行為者が話し手である質問文の場合、話し手の行為を聞き手が許容できるかどうかを尋ねるから、聞き手に「許可」を求める文になる。

(2) 「ビール、もらってもいい?」奈美江は訊いた。(高梨 2010: 70)

- ・行為者が話し手自身である場合は、話し手のその行為を行う「意向」を表すことになる。

(3) 「よかったら、夕食は私の方で何かこしらえてもいいわ」(高梨 2010: 71)

「でもいい」の「意向」の特殊性について、高梨 (2010: 71) は、「あくまで『その行為を行うことが許容できる』という消極的な意向の表明に留まる点で、意志形『しよう』などが表す『意志』とは性格が違う」と指摘している。

・ケース (b) : 許容

当該事態が制御不可能かつ未実現の場合、「でもいい」はその基本的意味である「許容」を表すことになる。

- (4) 「私、これから子供を育てて、自分の人生を始めなきゃならないのよ。だから笑われてもいい。力になって欲しいのよ」 (高梨 2010: 71)

・ケース (c) : 反事実 (不満)

当該事態が制御可能・非実現で、「反事実」となる場合である。

- (5) 「ごめんね、こんな食事に付き合せちゃって」奈美江がすまなそうにいった。「園村君は、外で食べてきてよかったのに」 (高梨 2010: 71)

・ケース (d) : 反事実 (後悔)

当該事態が制御不可能・非実現で〈反事実〉となる場合である。

- (6) パラリンピックで見た車いすはスポーティーで格好良かった。病気でなくても、ちょっと乗ってみたいな、と思わせるような子ども用のおしゃれな車いすがあってもいいのに。(高梨 2010: 71)

以上のように、高梨 (2010) は「でもいい」の意味について、「基本的意味」と「二次的意味」とに分けて説明している点で価値がある。しかし、まだいくつか問題点もある。

第一に、「二次的意味」として、高梨 (2010) が挙げている反事実の「不満」や「後悔」は、そもそも「でもいい」自体の意味ではなくて、過去形や「のに」から来たものであると考えられる。

第二に、「でもいい」の意味として、高梨 (2010) は「許可」「意向」「許容」「不満」「後悔」を挙げているが、CJC コーパスで検索すると、例 (7) のようにこのいずれにも入りにくい例も出てくる。例 (7) は後の3.2節で論じるように聞き手に対する「要求」の意味があると考えられる。例 (7) は当該事態が制御可能で未実現であるという点では (a) と同じである。しかし、話し手は譲治に「ご飯を炊くことを許可する」と言っているわけではなく、「私ばかりご飯を炊くのではなく、あなたが炊くことがあってもいいはずよ。今度はあなたが炊いてよ」と相手にご飯を炊くことを要求する場面で使われている。この場合、「でもいい」は当該の事態（この場合は「相手にご飯を炊くこと」）の成立する可能性を許容する意味を表す。

- (7) 「そう？ 昨日あたしが炊いたんだから、今日は譲治さんが炊いてもいいわ」(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

第三に、「二次的意味」が如何に基本的意味である「許容」から派生してきたのか、お互いにどのような関係にあるのかはまだ明らかになっておらず、その解明が必要である。本稿では、以上の問題点を踏まえて「Vてもいい」の体系性を考える。

3. 「Vてもいい」の意味記述

本稿では、「Vてもいい」の研究範囲を「食べてもいい」のように動詞に付く場合に限定し、「なくてもいい」のように形容詞に付く場合は考察の範囲から除外することにする。考察に際しては、主体の人称（一人称、二人称、三人称、不定人称¹⁾）と述語動詞の意志性を手がかりに、「Vてもいい」の意味を記述する。本稿では北京日本学研究中心の『中日対訳コーパス』(CJC)と国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)をコーパスとして使用する。以下、本節では各人称ごとに「Vてもいい」の意味の違いを見る。

3.1 Vの主体が一人称の場合

「Vてもいい」のVの主体が一人称の場合、「Vてもいい」は「意向の許容」の意味を表す場合と「不本意の許容」の意味を表す場合の2つの場合がある。次の例(8)～(10)は一人称主体の「意向の許容」を表す場合である。「見のがしてやろう」「送ろう」「上げよう」が直接的な話し手の意向を表すのに対し、「Vてもいい」を付けると「そうしないこともできるけど、そうすることもできる。だからそうしても構わない」という論理で、当該の事態をすることも許容できるという間接的な話し手の意向を表す。

- (8) いますぐ上げてくれれば、訴えるのはやめて、見のがしてやってもいい……不法監禁の罪は、軽くはないぞ！……どうしたんだ？ さっさと引上げたらどうなんだ！」(安部公房『砂の女』)
- (9) ですが、克平を羽田へ送るなら送ってもいいと思ってますの。長い間一緒に暮したんですから、最後にそのくらいのことはしてやりますわ。(井上靖『あした来る人』)
- (10) 「上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。(夏目漱石『こころ』)

一人称の「Vてもいい」について、奥田(1996)は「意志可能の文」とし、高梨(2010: 71)も「行為者が話し手自身である場合は、話し手のその行為を行う〈意向〉を表すことに

なる」として、「意向」の意味があるとしている。これに対し、本稿では直接的な意向を表す「(し)よう」の形式と区別するために、一人称を主体とする、話し手の意思を表す「Vでもいい」の意味を「意向の許容」と捉えることにする。例(8)は「もともとは訴えるつもりだったけど、いますぐ上げてくれれば、見逃してやってもいい」という意味であり、例(9)は「ふつうは送らないけど、克平なら送ってもいい」という意味であり、例(10)は「ふつうは上げないけど、今回は上げてもいい」という意味である。この場合、「Vでもいい」はある事態を実行しなくてもいいけど、実行することも可能であるという意向の許容を表すことになる。この場合、述語動詞は意志動詞が来る。

ただし、「意向」を表す「Vでもいい」は、他人に恩恵を与えるような感じをさせることがあるため、例(11)のように目上の人に使うと、失礼な表現であると取られかねないこともある。

(11) [先生に作文を見てほしいと頼んだところ、今日は時間がないと言われて]

今日時間がなければ、明日見てもいいです。(井上 2005: 93)

一方、一人称の「Vでもいい」には例(12)のように「不本意の許容」を表す場合もある。

(12) 引き返そうか、という考えが頭を過ぎたが、これまで来た泥を、帰って行くことも、出来そうな気がしなかった。ままよ、行けるところまで行って、動けなくなったら、殺されてもいいではないか。死ぬまでだ。これまでも幾度か、そう自分に納得さして来たではないか。(大岡昇平『野火』)

例(12)の「殺されてもいい」は、話し手が能動的に何かをする意向を表すものではなく、不本意ながらも受動的に事態の発生を受け止めたり、容認したりする場合である。この場合、「Vでもいい」は「本当はそうなりたくないけど、場合によっては(ある条件の下では)、そうなっても仕方がない」という意味を表す。これについて、奥田(1996: 170)は、「意図的な、必要な活動に随伴して、さけがたくおこってくる出来事であれば、『仕方なくみとめる』という、許容にふくみこまれている肯定的な態度はきわめてはっきりしてくる」と論じている。本研究もこの「許容」という捉え方を踏襲する。例(13)～(16)も「不本意の許容」の例で、例(13)の「軽蔑される」「きらわれる」や例(14)の「言われる」は受身の例、例(15)の「駄目になる」や例(16)の「困る」は無意志動詞の例である。この場合、いずれも「てもいい」と思う主体にとって不利益になるマイナス的な事態で使われており、主体は積極的に当該の事態を受け入れたいと思っているわけではなく、仕方がなくその事態を受け入れようと決意するような場面で「Vでもいい」が使われている。そのため、先のような意図的な「意向の許容」とは区別して、当該の事態を不承不承ながらも受け入れるという「不本意の許容」の意味を表す

と考える。

- (13) 「君に軽蔑されてもいい。きらわれてもいい。」(奥田 1996: 170)
- (14) 寄せ返す波のしぐさの優しさにいつ言われてもいいさようなら (俵万智『サラダ記念日』)
- (15) 夜空に向かって、凜子がゆっくりとうなずく。
「わたしは、いつ駄目になってもいいと思っているわ」(渡辺淳一『失樂園』)
- (16) 「あの金で買って上げるよ、ね、いいだろう、……………」
「だって、そうしたら困りやしない?……………」「困ってもいいよ、どうにかするから」
(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

なお、一人称の「Vてもいい」には、以下のようなものもある。

- (17) いろいろなお友達と付き合ってもいい? もう先のように文句を云わない? (谷崎潤一郎『痴人の愛』)
- (18) 遠い将来のことになるが、おれは国会議員になることを考えてもいいのではないだろうか……。 (石川達三『青春の蹉跌』)

例(17)の「Vてもいい」は高梨(2010)のいう「許可の求め」であるが、二人称の「付き合ってもいい」に対する質問文になるため、次の3.2節で触れることにする。また、例(18)は一人称であるが、二人称でも三人称でも置き換えられる、いわゆる「不定人称」の文であるため、3.3節で説明することにする。

以上をまとめると、主体が一人称の場合、表3のようになる。

表3 Vの主体が一人称の「Vてもいい」

主体	述語動詞	意 味
一人称	意志動詞	意向の許容
	動詞の受動態・無意志動詞	不本意の許容

3.2 Vの主体が二人称の場合

次に主体が二人称の場合の「Vてもいい」について見る。この場合、「Vてもいい」は「許可」「助言・誘いかけ・勧め」「要求」の意味を表す。まず、二人称の「Vてもいい」には、聞き手のしがつていることや、聞き手がこれからしようとするを許可する場合に使われる。

- (19) だがあまりきれいとは言えない身なりと不健康そうな顔色から、やはり昔と変わらない生活を送っているのだろうと想像はつく。『いる場所がないなら、ここにいてもいいぞ』本郷は罪滅ぼしの気持ちもこめて、本気で言った。(名倉和希『愛しい標的』)
- (20) あなたご自身の酔興から、ふっとここへ立寄ったという形にして、直治の案内でおいでになってもいいけれども、でも、なるべくならおひとりで、そうして直治が東京に出張した留守においでになって下さい。(太宰治『斜陽』)
- (21) しかし私は昨日この瀕死の狂人を見出した時、すぐ抱いた計画を、なかなか実行に移すことが出来なかった。私の犠牲者が息絶える前に呟いた「食べてもいいよ」という言葉が私に憑いていた。(井伏鱒二『黒い雨』)

例(19)は「もしあなたがここにいたいなら、ここにいても構わない」という相手の意思に対する「許可」を表している。例(20)(21)も同様である。このように「Vでもいい」が「許可」を表すのは、いずれも二人称の主体がそうしようとする意思を持つと話し手が判断した場合である。

3.1節の最後に挙げた例(17)は一人称の例であるが、「A：(私は) いろいろな友達と付き合ってもいいですか」「B：(あなたは) いろいろな友達と付き合ってもいいですよ」という会話の質問文に当たり、この「許可」の表現と対になった「許可求め」の表現となっている。

- (17再掲) いろいろなお友達と付き合ってもいい? もう先のように文句を云わない? (谷崎潤一郎『痴人の愛』)

一方、例(22)(23)のように、後続事態を実行する意思のない行為者に対して、話し手が行為者である聞き手に実行してほしい場合は「要求」の意味になる。

- (22) あんなにお金が増山あるのに、あたしに着物の一枚ぐらい拵えてくれてもいいと思うわ。(谷崎潤一郎『痴人の愛』)
- (23) もう飽きたのね。そうでしょう。はっきり言ってくれてもいいのよ。(石川達三『青春の蹉跎』)

例(22)と(23)にある「Vでもいい」は、それぞれ「着物一枚こしらえてほしい」「はっきり言ってくれ」という聞き手に対する要求を表す場面で使われている。元来「Vでもいい」は「Vしてもいいし、Vしなくてもいい」という動作の成立と非成立の両方を許容することを表す表現である。しかし、これらの場面は話し手の期待に反して聞き手が「Vしない(してくれない)」という場面で使われており、「実際にはVの事態が成立していないが、Vの事態が

成立する可能性を期待することも許容されるべきである」ということを、「Vでもいい」を使って相手に要求した表現である。そのため、これは「Vでもいい」の持つ許容性の意味に、二次的に「要求」の意味が付随した表現であると考えられる。先に2節で示した例(7)の「昨日は私が炊いたから、今日は譲治さんが炊いてもいいわ」という表現も、「譲治がご飯を炊くことを許容する」という意味ではなく、「実際には譲治はご飯を炊こうとしないけど、譲治がご飯を炊くということがあってもいい」という事態成立の許容性を述べ、さらにそれが相手への要求を表す表現となった例である。

さらに、二人称の「Vでもいい」には例(24)～(26)のように、許可でもなく、要求でもなく、話し手が聞き手に対して助言を述べたり、誘い掛けや勧めをしたりすることを表す場合もある。この場合、相手にそうする意思があるかどうかは不明であり、「Vでもいい」は相手の動作を許容するという意味は薄れ、相手が当該の動作をすることがあってもいいという事態成立の可能性を期待する表現となっている。

- (24) 「植物園の内部へは自動車ははいりませんわ。静かないいところですから少しぐらいお歩きになってもいいでしょう。散歩ですもの」(井上靖『あした来る人』)
- (25) そんなにお家に帰るのが辛いんだったらレッスンの時以外にもうちに遊びに来てもいいわよって。すると彼女は私にしがみつくようにして『本当にごめんなさい。先生がいなかったら、私どうしていいかわかんないの。私のこと見捨てないで。先生に見捨てられたら、私行き場がないんだもの』って言うのよ。(村上春樹『ノルウェイの森』)
- (26) ちゃんとした彼氏がいるのに、あなたとも中途半端なつき合いをしているわけでしょう。もし、あなたの彼女になっても同じような状況が起これば、また気持ちが揺れるでしょう。それでもいいなら、強引にいけばいいでしょうね。そんな悲しい恋愛は卒業してもいいと思います。(Yahoo! 知恵袋)

主体が二人称の場合、「Vでもいい」のVには同じく意志動詞が来る。しかし、後続事態を実行する主体の意思の有無によって、「Vでもいい」の意味は上で論じたように異なる。以上の考察をまとめると、表4のようになる。

表4 Vの主体が二人称の「Vでもいい」

主体	述語動詞	主体の意思	意 味
二人称	意志動詞	有	許可
		不明	助言・誘いかけ・勧め
		無	要求

3.3 Vの主体が三人称または不定人称の場合

次に主体が三人称の場合の「Vでもいい」について見る。この場合、例 (27)～(30) のように「Vでもいい」は「事態発生の許容」の意味を表す。

- (27) 「いやよ。そんなみじめな、いやよ。奥さんに見られてもいいような手紙なんか書かないわ。みじめだわ。気兼ねして嘘つくことないわ。」(川端康成『雪国』)
- (28) そんな人生があってもいいだろうか。社会のためにも、自分の生涯のためにも、大袈裟に言えば人類のためにも、何の役にも立たなかった愛。(石川達三『青春の蹉跎』)
- (29) 客間に飾ってあった机は室町時代の作とかいう漆塗りのもので猫脚になっており、清少納言や紫式部が凭れてもいいようなものであった。(井伏鱒二『黒い雨』)
- (30) ですから、この復興庁設置法の第四条第二項の第三号イについて、復興庁において査定の上、予算要求する旨、規定を見直すと、こういうことがあってもいいんではないかなと私は思っております。(国会会議録 2012)

以上の例では、いずれも第三者（あるいは物）が「Vでもいい」の当該事態の主体になる。例 (27)～(30) の「Vでもいい」は、それぞれ「奥さんに見られて構わない」「そんな人生があっても容認できる」「清少納言や紫式部が凭れてもおかしくない」「こういうことがあってもおかしくない」のような意味を持ち、広い意味での許容を表している。この場合、実際には当該の事態は起きていないが、万一そのような事態が起きても許容できるという意味になる。本稿では「事態発生の許容」と呼ぶ。この場合、動詞は動詞の受動態が無意志動詞である。

一方、例 (31)(32) のように人称の特定が難しい「不定人称」の文もある。

- (31) 薄い掛蒲団は、ほんの少し盛りあがっているだけである。殆ど平らであったと云ってもいい。(井伏鱒二『黒い雨』)
- (32) しかしまだ十八だ。むしろ原因は彼女の無知であると考えてもいいだろう。(石川達三『青春の蹉跎』)

例 (31)(32) における「といってもいい」と「と考えてもいい」は、人称の如何に関わらず誰が「言う」「考える」場面でも使われる。これに関して、奥田 (1996) では、「言ってもいい」に近い「言ってい」の「ていい」を「認識可能」と呼んでいる。これを受け、本稿では「認識可能」の意味の成立について次のように考える。すなわち、「～言ってもいい」は当該事態に対する認識を示しているが、そのような認識は動詞「言う」に由来するものであり、「Vでもいい」はあくまでも許容性を示すにすぎないと考える。たとえば、例 (31) の場合、掛け布団は実際には平らではないが、ほとんど平らに近い状態にあり、「(正確には) 平らでないと言

えるが、(大まかに言えば) 平らと言うことも可能である」という二つの事態の成立が許容されることを表している。この場合の「言う」は「考える」に近い認識の意味を表し、「Vてもいい」は二つの認識がともに成立することを表すにすぎないと考ええる。この「言う」と「Vてもいい」が合わさり、「言ってもいい」全体で「認識の許容」(奥田 1996の「認識可能」に相当)を表していると考えられる。同様に例(32)の「考えてもいい」も、「Vてもいい」自体は当該の原因に関する複数の考えについて、どれも成立する可能性があることを表すに過ぎず、「考えてもいい」全体で「認識の許容」を表していると考えられる。この場合の「考える」や「言う」は意志動詞であるが、意図的に考えたり言ったりすることを表すのではなく、断定を和らげるモダリティ的な機能を果たしていると考えられる。

以上のように、主体が三人称や不定人称の場合は、「Vてもいい」は対人的機能を持たず、事態に対する「事態発生の許容」「認識の許容」といった評価を表す。以上の考察をまとめると、表5のようになる。

表5 Vの主体が三人称や不定人称の「Vてもいい」

主体	動 詞	意 味
三人称	動詞の受動態・無意志動詞	事態発生の許容
不定人称	意志動詞	認識の許容

3.4 まとめ

以上、本節では「Vてもいい」のVの主体の人称別に意味を見た。「Vてもいい」の基本的意味は「許容」であるが、主体の人称、動詞の意志性、主体の意思の有無などにより、様々な意味になる。これを整理すると、表6のようになる。

表6 人称別「Vてもいい」の動詞と意味

主体	動 詞	意 味	
一人称	意志動詞	意向の許容	
	動詞の受動態・無意志動詞	不本意の許容	
二人称	意志動詞	主体意思：無	要求
		主体意思：不明	助言・誘いかけ・勧め
		主体意思：有	許可
三人称	動詞の受動態・無意志動詞	事態発生の許容	
不定人称	意志動詞	認識の許容	

4. 終わりに

以上、本稿では「Vてもいい」の意味を考察した。「Vてもいい」は「Vをしてもいいし、

しなくてもいい」あるいは「Vになってもいいし、ならなくてもいい」という事態の成立・不成立を共に許容する表現である。それが主体の人称、述語動詞の意志性、動作主体の意思の有無などの違いによって、様々な意味に派生して多義的な意味を形成していることが分かった。しかし、「Vでもいい」の各意味の間に、どのようなつながりがあるかは、さらに分析の必要がある。今後は他のモダリティ形式との比較も視野に入れながら、分析を進めていきたい。

注

- 1) 本稿では、以下のような、どの人称とも理解できる場合を「不定人称」と規定する。

例：鯨島は全国津々浦々といってもいいほど出張ばかりしていて、芸術品や出物の話をきくと眼のない男である。(水上勉『越前竹人形』)

使用したコーパス

北京日本学研究中心『中日対訳コーパス』(CJC)

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)

参考文献

- [1] 井上優 (2005) 「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」[C]. 野田尚史(編)『コミュニケーションのための日本語教育文法』. 東京：くろしお出版.
- [2] 奥田靖雄 (1996) 「現実・可能・必然 (中)」[J]. 『ことばの科学』7. 東京：むぎ書房.
- [3] 高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ：現代日本語における記述的研究』[M]. 東京：くろしお出版.
- [4] 陳林俊 (2013) 『現代日本語モダリティの体系的研究』[D]. 上海外国語大学博士学位論文.
- [5] 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』[M]. 東京：くろしお出版.
- [6] 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』[M]. 東京：くろしお出版.

キーワード：Vでもいい、意味、許容

AbstractA Semantic Study of Japanese “*V-temoi*”

Chen Linjun

This paper reports a corpus-based survey of the meanings of “*V-temoi*” in Japanese. Research reveals that the primary function of “*V-temoi*” is to express “permission”, and that it can also be used to denote different secondary meanings when co-occurs with different persons of agents, volitionalities that verbs express and subjective intentionalities.

Keywords: *V-temoi*, meaning, permission